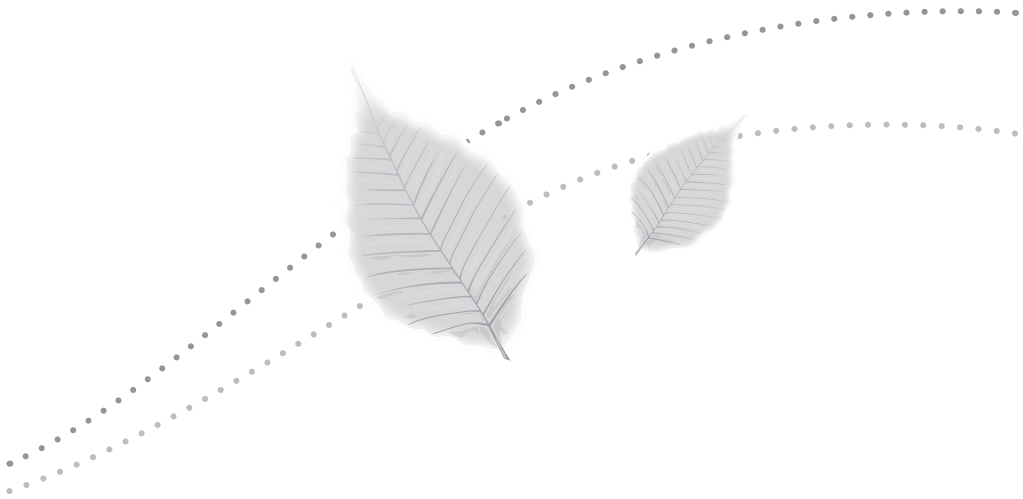


映画の中の“ことば”—美しい日本語。

野上 照代



映画の中の「ことば」といえば、なんととっても「せりふ」である。昔から映画監督は台詞の言いまわしに心血を注いだものだ。

黒澤明の遺作『まあだだよ』（一九九三年）の初日の撮影は、松村達雄の扮する主人公内田百閒先生が教室の扉を開けて入ってくる場面だった。生徒たちが慌てて席につく。先生は教壇に上り、たなびいている煙を見て「教室で煙草を吸ってはいかん」と第一声。ところがその言い方が監督には気に入らない。その日は中止。二日目も学生諸君共々、テストのくり返して終わった。三日目の朝、黒澤監督は台詞を変える、と言う。

「教室で煙草を吸ってはいけない」にしてみようと言い、それでやっとOKになったのである。

山田洋次も諦めの悪い監督で、撮影現場でも制限時間一杯粘るタイプだ。

『寅さん』の時もこんなことがあったそうだ。ロケ先の宿で、翌日撮影する笠智衆さんの台詞が気に入らず、台本を直していると隣室の笠さんがその台詞を何度も稽古している声が聞こえてくる。山田さんは「その台詞、明日変わりますよ」と、笠さんに言うべきか悩んだそうだ。

昔の映画には音が無かった。

台詞の部分は、画面にタイトルが出る。役者は適当に口を動かし怒った顔をする、タイトルは「無礼者め！」となるのである。

のがみ てるよ 1927年東京生まれ。戦後雑誌記者を経て、黒澤明の『羅生門』から『白痴』を除く全作品に記録・製作で参加。'84年に読売で受賞した自伝的作品を'07年山田洋次が『母べえ』に映画化。著書に『天気待ち 監督・黒澤明とともに』『蜥蜴の尻っぼ』（文藝春秋）。

ここまででは、洋の東西を問わずチャップリンとて同じだが、驚くなかれ日本には、今なお世界に誇る独特なシステムがあった。それは、活動写真弁士が略して「活弁」がスクリーンの横に立ち、画面を見ながら生の声で説明するのだ。伴奏の楽士付きというのもあったのである。

現在、澤登翠さんがこれを伝承、世界中を駆けめぐって公演している。

一九〇三年（明治三十六年）に会館した浅草電気館に染井三郎という弁士が初登場した。（山野一郎「人情映画バカ」一九一一年には、フランス・エクレール社の大活劇『ジゴマ』がこの電気館で上映されるや押すな押すなの超満員となった。

犯罪の後にZ（ゼット）という字を残してゆく怪盗ジゴマとそれを追う探偵の追いつ追われつ智慧比べ。

「花のパリーカロンドンか、月が鳴いたかホトトギス。フランスはパリの町に今や起こる怪事件」と、その七五調の名調子に観客はしびれ、当時の弁士は花形大スターだった。

一九三二年、二十三才で躍り出た新鋭監督山中貞雄の『小判しぐれ』は、その美文調で有名だ。一捕手と闘った太郎吉が橋から川へ身を躍らせる。笠がゆるく流れるのにタイトルがタプる。「流れて」「流れて」「ここはどくじやと」「馬子衆に聞えば」「ここは信州」「中山道」と、名調子であ

る。

山中は名作『人情紙風船』完成の日に招集され中国戦線で戦病死した。二十七才だった。

一九三一年（昭和六年）、新宿武蔵野館その他でクーパーとデイトリツヒの『モロッコ』が上映されたが、これが初めての日本語字幕付き映画で翻訳者の清水俊二氏はニューヨークへ招かれて作業をしたという。

この翻訳字幕のシステムもまた、世界に誇る日本独特の文化である。大抵の国では、輸入映画の台詞を自国語に吹き替える。日本でもテレビやアニメの場合、吹き替えが必要なものもあるだろうが、私には矢張り、本物の俳優の声を聞ける方がずっと有難い。

ただ字幕は、タテ一行が十文字で二行までと決まっている。だがここで日本語には「漢字」という伝家の宝刀を抜くことが出来るのだ。素晴らしきではないか。漢字は見た瞬間に理解出来る。耳で聞くスピードの約三分の一といわれる。

日本の言葉ほど美しく、感覚的な表現が他国にもあるのだろうかと思う。

中でも擬音語は格別だ。雨の降り方だけでも、「ぽつぽつ」「しとしと」「ざあざあ」とある。

ところが近頃は新聞までも片仮名を使い、コンテンツワーク・シェアリングとくる。英語は洒落ていると思いきや曖昧にするためか。